

アガペーに出会う（第3回）「無条件の愛との出会い」

聖書箇所：ヨハネによる福音書 8章1～11節

1 イエスはオリーブ山へ行かれた。2 朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御もとに寄って来たので、座って教え始められた。3 そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦淫の現場で捕えられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、4 イエスに言った。「先生、この女は姦淫をしているときに捕まりました。5 こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」6 イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書いておられた。7 しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」8 そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。9 これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と立ち去ってゆき、イエス独りと、真ん中にいた女が残った。10 イエスは、身を起こして言われた。「女よ、あの人たちはどこにいるのか。誰もあなたを罪に定めなかったのか。」11 女が、「主よ、誰も」と言うと、イエスは言われた。「私もあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

このウェルカムサンデーの機会を用いて、「アガペーに出会う」シリーズを継続してまいります。これまでの二回で、私たちが生まれたときから何らかの意味で条件付きの愛に縛られてきたこと、その結果として心に痛みやゆがみを抱えてしまったこと、そしてそれが連鎖的に周囲の人間関係に影響を及ぼし、罪の実態となって現れてきたことを見てきました。今日は、そのような私たちに注がれる「無条件の愛」——アガペーとの出会いについてご一緒に味わいたいと思います。

ヨハネによる福音書8章に描かれている有名なエピソード。ある朝、イエス様が神殿の境内におられたとき、律法学者たち（ユダヤ教の法律家たち）が一人の女性を引き立ててきました。彼女はどうか姦淫の現場で捕まったようですが、この状況はやや違和感を感じさせるものがあります。彼女がどういう背景の人だったのかは分かりません。貧しさゆえに身売りをしなければ生きていけなかったのか、あるいは誰かとの不倫関係にあったのか。いずれにせよ、その現場で待ち伏せされていたかのように捕えられ、公開処刑的に引き摺り出されて来たのです。そして、このシチュエーションの本質は、「イエスは彼女をどう判断するか」という究極の選択を迫るためのものに見えてなりません。なぜなら、そもそもユダヤの法で「姦淫は死刑に値する」と定められているのであれば、イエスに問うまでもなく彼女は有罪であったからです。しかし、6節で言われているように、彼らがイエスの許に彼女を連れて来たのは、「イエスを試して、訴える口実を得るため」であったことが分かります。彼らの目的とは何だったのか。それは、もしイエスが彼女の罪を不問に付すなら、イエス自身を律法違

反者として訴える口実ができる。しかし、ローマ帝国の支配下にあったユダヤでは死刑執行権がなかったため、もしイエスが石打ちの刑を認めるなら、彼をローマの法秩序を無視する反逆者として訴えることができる。そのような罠を仕掛けるための茶番劇だったのです。とはいえ、このような状況下に立たされた彼女は、地面に顔を伏せ、ただ震えていたことでしょう。彼女の周りには、“正しさ”を振りかざす手と、裁きの視線が集まっていました。

野次馬が取り囲み、「どうするんだ!」「黙ってないで早く答えろ!」という怒号が飛び交う中、イエスはただ静かに、地面に何かを書き始めます。それから、顔を上げて言われました。「**あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい**」(8:7)。一瞬、沈黙が落ちました。やがて、一人また一人と、誰もが手にしていた石を置いて、去っていきました。最後には、そこに残されたのは、イエスとその女性だけでした。ちょっと想像してみましょう。この女性は、多くの裁きの声に取り囲まれ、自分がこれからどうなってしまうか分からない恐怖に慄きながら、地面に文字を書き続けるイエスがどう判断するのか固唾を飲んで見守っていたと思われます。イエスもまた、彼らと同様に自分を裁くかもしれない。彼女は精神的に究極の孤独を味わいながら、イエスの背中にのみ一縷の希望を託していたはずです。そこで発せられたことば——「**あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい**」(8:7)——誰も予想しなかったイエスの返答は、この女性にどれほどの安堵感を与えたことでしょうか。そして、彼女は自分をありのままに受け入れかばってくれたイエスの背中の陰に隠れるように、多くの裁きの視線から逃れたのです。

イエスは、彼女に言いました。「**私もあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない**」(8:11)。この言葉の中に、アガペーの本質があります。イエスは彼女の罪を「なかったこと」にはしませんでした。しかし、その罪を**裁くことを選ばれなかった**のです。ここに、「無条件の愛」の力があります。それは、罪を無視する愛ではなく、罪を知ったうえで**赦しを差し出す愛**です。そして、その赦しの中であってこそ、人は「新しく生きたい」と願うようになります。不思議なことに、どれほど正当性のある主張をもって相手を論破しても、人の心は変わらないばかりか、さらに心を閉ざしてしまうかもしれません。人の心がフッと緩むのは、自分がそのまま受け入れてもらえたことを実感するとき——裁きではなく存在を受容されたときなのです。

ある殺人者が、一人の牧師の許を訪ねました。彼は涙みをもって牧師に言いました。「私は殺人を犯してしまいました。あなたはこれを聞いてどう思いますか」。しばらく黙っていたその牧師は、答えました。「そんな大変なことを、初対面の私によく話してくださいましたね」。それを聞いた男は、その場で泣き崩れたといいます。牧師は、彼が行なったことが法にふれる問題であることを理解していなかったのではありません。そして、その罪をなかったことにしたのでもありません。行き場のない気持ちを打ち明けてくれた彼の思いをそ

のまま受け止めたのです。自分の心の真実を人に話すということがどんなに難しいことであるか、この牧師は知っていたのです。

もしかすると、私たちの中にも、あの女性と同じように「人に知られたくない部分」を抱えている人がいるかもしれません。

「あんなことをしてしまった自分はもう終わりだ」

「もう神様の前に出られない」

でも、イエス様はあなたを見捨てません。石を投げる人たちが去ったあとも、あなたのそばに残り続けてくださる方です。そしてこう言われます。「わたしもあなたを罪に定めない」。このことばに出会うとき、私たちは初めて“受け入れられた”という深い安心感に包まれます。努力や行いではなく、存在そのものを見つめてくださる神の愛。それこそが、アガペーです。このアガペーに触れるとき、私たちは他者を裁く手をおろし、自分を責めていた心をゆるめ、そして、「新しく生きてみよう」と思い始めるのです。

アガペーとの出会いは、人生の転換点になります。それは、大きな出来事ではなくても、ひとつのまなざし、ひとつの赦しのことばが心に火をともしてくれるのです。

今回は、「アガペーが育む新しい人間関係」というテーマで、赦され、受け入れられた私たちが、今度はどう生きていくのかを見ていきます。アガペーは、私たちの内側だけで完結しません。それは他者に向かって流れていく愛。新しい関係のかたちが、そこから始まっていくのです。今週も主のまなざしに包まれて歩みましょう。

【祈り】

愛と憐れみに満ちておられる主よ、あなたが今日、もう一度私たちに語ってくださったことを心から感謝します。私たちは、何度も何度も「もうだめだ」「愛される資格なんてない」と思ってしまいます。けれどあなたは、私たちのそばに静かにとどまり、誰よりも深く私たちの痛みをご存じで、「わたしもあなたを罪に定めない」と、赦しとともに語りかけてくださいます。どうか今日、石を投げようとしていた私の手が、自分を責め続けていた私の心が、あなたのアガペーに触れて、静かにおろされていきますように。そして、「これからは新しく生きていこう」と、あなたのまなざしに励まされて、また一歩、あなたの光の中を歩んでいきますように。裁きではなく、存在そのものを受け止める愛——そのアガペーに、私たちの心を今日も明日も、ゆだねます。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
裁くことよりも、赦すことを選ばれた、主イエス・キリストの恵み、
そのままのあなたを受け入れ、包み込んでくださる、父なる神の愛、
罪に定められたと思っていた心に新しい息吹を吹き込んでくださる、聖霊の親しき交わり
が、
ここに集うすべての方の上に、また、それぞれが歩む日々の生活の上に、
今も後も、とこしえまで豊かにありますように。